FRONT LINE REPORT CASE 2

大分県宇佐市長
元時枝内科医院院長
時枝正昭 氏
Masaaki Tokieda

history

時枝 正昭 氏

1934年 大分県宇佐市上時枝に生まれ、育つ
1953年 大分県立四日市高等学校卒業
1959年 九州大学医学部卒業
1960年 九州大学温泉治療学研究所内科入局
1967年 医学博士
1969年 九州大学講師（九大温研内科）
1970年 宇佐市で内科医開業
2000年 宇佐市長に就任（現在3期目）
1981年 宇佐市教育委員に就任。2期8年（うち4年間は教育委員長）
1990年 宇佐郡市医師会長（5期）、宇佐高田医師会病院長に就任（5期10年間）
その他、大分県医師会理事（4期）・大分合同新聞「灯」同人・著書『患者の椅子』『福郎のひとりごと』

開業の受け継ぎは難しい。
あまり頭が良すぎると、大学から戻ってこない。
あまり悪すぎても、国家試験に受からない。
ほどほどでないと後を継いでくれない。

患者本位の医療。
その土地に結びつき、
培われ、息づく医療。
周りを支え、
周囲に支持されて。

FRONT LINE REPORT CASE 2

時枝内科医院
院長
時枝正史 氏
Masashi Tokieda

市長という"道楽"

現在、医師の市長は全国で13名いるが、九州では1人だけ。時枝内科医院、元院長の時枝正昭氏がその人である。

同氏はそれまで開業していた医院をご子息に譲り、2000年4月に宇佐市長に就任した。今年で6年目。以来、市長の公務、その他に忙しくご活躍されている。

たとえば、宇佐市行財政改革本部長、渇水対策本部長、不妊症治療費助成事業の導入、宇佐神宮・国東半島の世界遺産登録推進運動など、市長としての仕事はもちろんのこと、宇佐エコミュージアム協議会会長、宇佐市体育協会会長、宇佐八幡神輿フェスタ振興協議会会長を務めるほか、学校や社会団体の行事の来賓、社会活動やスポーツ振興や各種講演会など。

これらのほかにも、まだまだ多く、その活躍には目まぐるしいものがある。

また、全国市長会のなかに設置された"介護保険対策特別委員会"の委員もされており、会議のために東京へ出張されることも少なくない。

数年来、課題となっていた宇佐市と周囲の2つの町との市町村合併にも、合併協議会会長として尽力し、今年の3月31日に誕生した新しい宇佐市の初代市長に無投票当選を果たされたばかりである。

現在、「彩に満ちた暮らしの元気都市」を目指して奮闘中の同氏。しかし、「市長はまさに道楽なんですよ」とこともなげに語る。

「この年齢では、私の一生は終わったようなものですから。跡を継いでくれるのがいて、今こんな道楽ができる。幸せ者です」

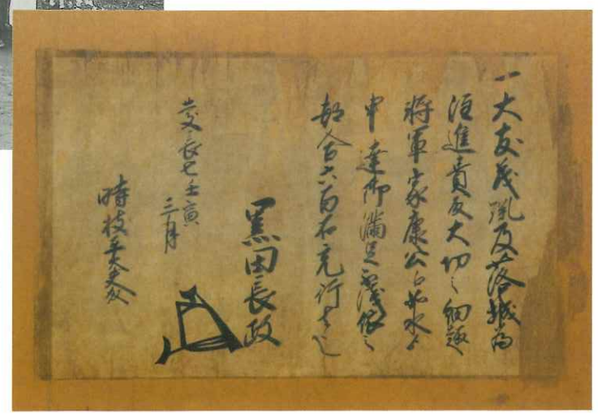
history

時枝 正史 氏

1963年 大分県別府市にて生まれ、宇佐市にて育つ
1982年 大分県立四日市高等学校卒業
1989年 北里大学医学部卒業、同大学病院にて内科研修の後、大分医科大学第2内科入局
1993年 医学博士
2000年 3月、父のあとを継承し時枝内科医院 院長に就任

人と人が向き合う、笑顔のシルエット。時枝内科医院の頭文字"T"の文字を象りました。

宇佐市上時枝（旧糸口村）の
「初代」時枝内科医院。
中央が初代の故 時枝 正喜院長。



戦国末期、豊臣秀吉の重臣であり、宇佐の領主でもあった黒田長政から、当時の時枝城主だった時枝平太夫鎮継に宛てた書簡。時枝内科医院の先祖は、その下級武士だったのではないかという。

人を選ばず言を交え、己の意志を率直に言う

気負うことなく、淡々と、かつ愉しげに語る同氏の人となりといえば…。

「大分県は、宇佐郡四日市町上時枝なる百姓村の生まれ、親父は医者でその第七子、しかも長男兼末子であり、氏も育ちも、どう見てもおらが村のインテリ村長タイプである」とある。

また、「彼を評する者、口を揃えて社交的な知識人という。蓋し、彼の良さは、人を選ばず言を交え、己の意志を率直に言うことにある」と評されている。いわゆる、気さくでザックバランなお人柄というところだろうか。

この人物評は、九大クラス会"三四会"雑誌「筍林（じゅんりん）」に掲載されたもの。

今は政治のほうがメインで、ときどき患者を診るという時枝氏。

「休みの日に家にいると、患者さんが来院することがあります。看護師さんが『若先生がいらっしゃらないので、先生診ていただけますか』と来ると、私が診ることになります。出て行くと患者さんが『今日は先生ですか、運がいいなぁ』と言いますが、私は『ヤブ医者だから、運がいいことないよ』と返します」

1代目と2代目の開業

時枝内科医院は、現在の時枝正史氏で3代目になる。

初代が開業したのは大正11年。それを記すため、医院の正面玄関には"Since 1922"とある。

「1代目が開業したのは、今の医院がある場所から北西の上時枝というところでした。非常に厳しい父親でした」と2代目時枝氏は語る。

同氏は大学に行くまで、その地で育った。

しかし、大学に入った年の夏休みに、父親が脳卒中で倒れ、寝たきりになる。

その間、医院にはほかから医師を頼んで来てもらっていたが、医局時代にその医師が辞めることになり、上時枝の医院に戻らなければならなくなったとのこと。

「医院に医師が誰もいなくなったので、母親が私に帰ってきてくれと言うわけです。そこで教授に相談したり、いろいろ思い悩んだ挙句に、結局、医院を継ぐことを決心しました」

2代目の開業は昭和45年（1970）。忘れもしない、ちょうど大阪万国博覧会が開催されていて、8月に家族で見物に行っての9月1日だったという。

父親の苦労と周囲の期待

時枝氏は、最初から医師になろうと思ったのではない。

「私は父親から、こんな苦労はさせたくないから、お前は医者にならなくてもいいと言われていました」と語る。

子供の頃、雪の降る寒い深夜に見た父親の思い出。

玄関を叩く音がした。

母「Aさんとこのおじいちゃんが、高い熱で苦しんでるそうです。往診をしてくださいと言ってます」

そのとき、父も流感による高熱で寝込んでいた。

父「こっちだって動ける状態じゃない。薬を作ってあげて、往診の方は断ってくれ」

しかし、しばらくして、けだるそうに起き上がった父。身支度を始めた。

母「今からホントに往診をするんですか？それなら何も、私にわざわざ断らせることはなかったじゃないですか」

父「そう言うても"かかりつけ"の患者さんが悪いんなら、行かんわけにゃいかんじゃろう」

そう言いながら、自転車で吹雪の中を出かけていった。

その様子を見ていた、まだ子供だった時枝氏。

「子供心に私は、医者という職業の大変さを感じたものである」と自著に記している。

それがあって、息子の正史氏には、医学の道に進むことを勧めることはしなかったという。

「医者になっても苦労が多いことはわかっていましたし、向き不向きがありますから、無理をしてまでなる必要はないと思っていました。ただ、母親は期待してましたね」

と父としての時枝氏はいう。

といっても、周囲は医院の跡継ぎとして期待を寄せる。

「それが自然に伝わってくるんですね」

一方、正史氏も同じことを経験したという。

「家に帰ってきても、父はずっと働いているわけです。夜中も結構起こされているようでした。1日中仕事とかかわっていて大変そうだなとは漠然と感じていました」

しかし、やはり「小学校の頃から親戚や周りの人から、将来はお医者さんになるというようなことを言われて育ちましたので、医学部に行くことが自然のように思っていました。それ以外の道は考えつかなかった」という。

3代目で建て替えられた新しい時枝内科医院の正面玄関。心が休まる優しさを醸し出している。「南欧風リゾートホテルのような雰囲気を出したいと設計士と夜遅くまで何度も話し合いました」

誤解から生まれた3代目の開業

そういう正史氏が開業したのは、正昭氏が宇佐市長に就任した年だった。市長選出馬の話はそもそも、それ以前、何年も前からあった。

当時の大物市長が体調不良で辞めるにあたって、同氏を強く推薦したことから、それ以来、周囲の期待が集まり、市長選のたびごとに候補者として氏の名前が挙がるようになっていたからだ。

しかし、正昭氏は医院をやっていたため、ずっと断り続けていたのである。

その折も折り、大分医大に勤務していた息子の正史氏が、時枝内科医院の近くの高田中央病院に派遣されて勤務することになり、それを機会に同医院のすぐ脇に自宅を新築することになった。

すると、周りが「坊ちゃんが帰ってきて、跡取りができたのだから、もう市長をやっていただいてもいいじゃないですか」と。つまり、思わぬ勘違いのせいで断る理由がなくなってしまったのである。

「これ宿命かなと思ったんです。それで出るつもりになりました」と時枝市長はいう。

そこで、大分医大の主任教授に許しを請い、正史氏は開業した。そのとき、正史氏35歳。奇しくも、父、正昭氏が開業したときの年齢であった。

"かかりつけ医"の本懐

時枝内科医院の建物のなかに一歩足を踏み入れると、院内は清潔感が溢れ、明るく優しい雰囲気が広がっている。

ここぞというときは、納得いくまでとことん物事を掘り下げるという時枝正史院長。

「父から医院を引き継いでから建物の建て替えまでの4～5年の間、これから20、30年、どんなスタンスで医療をやっていけばいいのか、ずっと考えていたんです」と語る。

建物の設計の段階でも、自分の理念を形にするため、深夜まで設計士と打合せを繰り返したという。

ホスピタリティーのある医院。「来ていただいた方に、少しでもリラックスしていただけるような、いわばリゾートホテルのようなイメージにしたかった」

その間、父の正昭氏はまったく口出しはしなかったという。

「完全にまかせっきりです。相当な部分で私を超えていますから。医療的な点でも、技術的なことを何か言うことはありません」

正史院長も、「父は私のスタイルでやっても、任せてくれて、そういった面では楽でした。医院の継承にはいろんなスタイルがありますが、引き継ぐまでにいっしょに診療する時期があると、揉めたり、仲が悪くなったりと、わりとそういう話をよく聞くのです。

院内の部屋は、洋室のほか和室もある。患者さんが普段の生活と変わりない気持ちでいられるように気を配ったとのこと。

うちの父の場合は、じゃ、任すかと、人に任せられる性格なんです。全体が良かったら細かいことにはこだわらないタイプです。そういった面ではよかったと思います」

待合室の壁のボードには、「集う人々が笑顔になる医療」とある。

自分の医院経営の姿勢を患者さんやスタッフに明確にするために、建て替えにあたって最初に作ったのがこの理念であったという。

「人の人生から苦しいことや辛いことをいくらかでも取り除いて、有意義な人生を少しでも長く送っていただく。この手助けをすることが医療機関としての役目だという気持ちを込めました」

ちなみに、父、正昭氏が医師会長時代に、医師会病院の中庭に建立した記念碑に採用したのは「肌のぬくもりある医療」である。患者本位の医療。

食事のときなどには、お二人の共通する患者さんの話も出るという。また、なかには、三代にわたって時枝内科医院に診てもらっていた人もいるという。

古代から滔々と流れる神話の国、宇佐。その土地に生まれ、培われ、息づいている医療。周囲を支え、周りから支持される、"かかりつけ医の本懐"、ここにあり。

何気ない一言が、その人の何かを変えることがある。
患者さんとのそういう出会いができれば、ほんとうにありがたい。

「表現の仕方はいろいろありますが、行き着くところは、結局、患者さんのためにというところしかないのです。何気ない言葉でも、患者さんからすると、その一言が自分を変えてくれたって、そういう出会いができれば…」